

ケアマネの出会った 家族たち

4

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

～真剣勝負～

私には、この春中学を卒業する息子がいます。息子が保育所に通っている頃、将棋を覚えてきました。覚えてたの将棋がしたくてたまらない息子は主人に相手をしてもらって勝負をしていました。まだ、初心者、しかも保育所児童。主人は、「飛車」「角」抜きで、などとハンディをつけて勝負をしていました。それでも、息子は負けてしまいます。勝負が決まりそうになると、悔しくて泣いたりぐずったりする息子を励ましたり、叱ったりした記憶があります。ハンディがついているにも関わらず負けてしまうことに、悔しさ倍増だったのかもしれませんが。ある時、私の父と息子が将棋の勝負をしていました。何気なく見ていると、父は「飛車」も「角」も抜いていません。しかも、その指し手はとても保育所児童を相手にしているようではなく、言ってみれば

大人げない真剣勝負です。案の定、すぐに勝負は決まります。息子の負けです。ところが、息子は泣いたりぐずったりはしません。「もう一回」と催促して、何度も挑戦します。決して勝つことはできないのですが、真剣に相手をしてくれる父に、息子も泣くことも忘れ勝負に挑んでいたのでしょう。それもまた、懐かしい思い出です。今、父は病気で寝たきりになってしまったので、将棋を指すことはできませんが、息子は父の指し手を覚えているようです。今、息子と主人が勝負をする時には、ハンディなど付けていたら、主人の方が負けてしまいますから、ハンディなしの真剣勝負です。勿論、負けても泣くことはなくなりました。

人は、自分の力をディスカウントされずに、ちゃんと認めてもらうことで自分の力を出し切ることができるのかもしれませんが。

～夫婦の二人三脚～

子供のころ、仲の良い友達と二人三脚をした記憶があります。二人のリズムが合うと、弾むような歩調で顔もほころびながら進み、タイミングがずれてくると歩調も怪しくなっていて、前進しなくなります。どちらかが転んでしまうと、立ち上がる方も、立って支えている方も身動きがとりにくいものです。

二人の足を結んでいるからこそその制約があって、うまく進めると楽しいし、バランスを崩すとやりにくい、なんだか夫婦で歩む人生のようです。夫婦はやがて、その紐をほどき（別れが訪れ）一人で残りの人生を歩むことになります。その時に感じるのは、自由になった歩きやすさでしょうか。軽いけれども、もう片方の足がバランスを失って次の一步を踏み出すための戸惑いかもしれません。せめて、二人三脚をしている間だけは、悪戦苦闘しながらも、時にこぼれる笑いを堪能しながら進んでいけるのがいいなと思います。

88歳の礼子さんは、85歳の夫トメ吉さんとの二人暮らしです。10年ほど前から、徘徊や昼夜逆転などの認知症状がみられるようになりました。トメ吉さんは妻の変化を認知症ではなく、老いとして受け入れました。また、礼子さんが出来なくなったことを自然にカバーする形で、家事全般がトメ吉さんの役割となっていました。そんな夫婦を近隣に住む、娘や息子たちは付かず離れずの距離感で手助けしていました。礼子さんの認知症はゆっくりでしたが確実に進んでいました。最近では、昼夜逆転、夜中の徘徊が毎日のように続くようになり、起きている間は常に幻視が伴うようになっていました。トメ吉さんも妻の状態を、もはや老いとして受け入れることが困難なまでに疲弊していました。

老親の生活の助けになれば、と娘は介護保険サービスの手続きを始めました。認定の申請、ケアマネとの調整、あつという間に礼子さんのデイサービス利用が決定されました。ところが、礼子さんがデイサービスに通うことはありませんでした。

娘は、母がデイサービスに参加している間、父の介護負担を減らせるのではと考えていました。けれども実際には、礼子さんだけでなく、トメ吉さんも娘の提案には同意しませんでした。それどころが、娘が良かれと思って、老親の元へ頻りに訪問し家事などの手助けをすればするほど、トメ吉さんは娘の協力を固辞するようになりました。

トメ吉さんは、前夫と死別し子供二人を抱えた礼子さんと20代の前半に結婚しています。まだ若いトメ吉さんと礼子さんに実子が授かっても不思議はない時期でした。けれども、二人に実子はいません。トメ吉さんは「自分は貧乏に生まれ、早い時期から奉公に出されていた。学校にも通えなかった。だから、子供たちにはきちんと教育を受けさせたかった。自分が頑張ることで、妻と子供たちが幸せになればいいと思っていたから、自分たちの子供が欲しいとは考えもしなかった。」と語ります。妻子のために必死に頑張ってきたトメ吉さんの人生が見えました。そして、「自分はどんなに苦しくてもいい。子供たちに少しの財産を残して、妻は自分ができるだけみてやりたいと思っている。」と続きます。

娘が良かれと思って手配した介護保険制度は、「他人に迷惑をかけるな。」という時代を生きてきたトメ吉さんにとっては、訳のわからない制度です。これまで、必死に妻を支えてきたトメ吉さんは、急に自分の役割を失ってしまったのでしょうか。二人三脚で転んでしまったのは、礼子さんではな

くトメ吉さんでした。礼子さんは、トメ吉さんの立ち上がりを待っていたのです。

ケアマネは、いずれ二人が紐をほどく日のことも想像しながら、少しずつ紐を緩めて歩く練習が必要だと思いました。そこで、トメ吉さんができること、娘に協力してもらいたことを話し合いました。また、老いと捉えていた認知症について、トメ吉さんにも理解できるように少しずつ情報と対応のコツを伝えました。間もなく、娘の協力や介護保険サービスを取り入れて、トメ吉さんは礼子さんとの新たな二人三脚を再開しました。「皆が勧めてくれるうちに（ディサービスに）行ってみた方が良いよ。」というトメ吉さんの言葉が後押しになって、礼子さんはディサービスに通うことになりました。今では、週4回もディサービスに楽しく通う事ができ、BPSDも落ち着いています。トメ吉さんも、一人の時間を、新たな気持で礼子さんを迎える時間に変化させることができました。

～山あり谷あり～

礼子さんとトメ吉さんの穏やかな生活が続いていました。けれども、人生は山あり谷ありです。トメ吉さんが体調を崩して入院してしまいます。近隣に住む娘や息子の協力のもと、礼子さんは自宅で生活を続けることができました。

体の不自由さが残りながらも、療養を終え自宅に戻ったトメ吉さんは、なんとなく以前よりも頑固になってしまいました。思うようにならない自分の体になのか、イライラした態度が妻の礼子さんや娘たちに向けられます。

心配した娘が頻繁に手伝いにやってきますが、トメ吉さんのイライラは落ち着かず、その怒りはいつも娘に向けられていました。そんな矢先、今度は娘も体調を崩してしま

います。娘の手助けも受けられない状況になってしまいました。

自分の思うような協力が、娘や息子から受けられないと感じたトメ吉さんは、子供を頼らず自分たちだけで生活していきたい、と考えました。不自由な体を駆使して家事をし、妻の介護を始めます。食事の支度、妻をディサービスに送りだす、帰宅後の妻の介護、一人で悪戦苦闘します。退院後は、トメ吉さん自身の身の回りの事にも手助け必要だった状態にも関わらず、今では、ほとんど自分の力で日常を送ることができるようになりました。時間が経っても、負担があっても思った事をやり遂げる力がトメ吉さんにはあるのです。

体調を崩した娘が、夫婦の元へくることも少なくなりました。トメ吉さんに、今後どんな生活がしたいか、聴いてみました。すると、「母さん（妻礼子さん）の世話は自分がやっていく。時々変なことも言うけれど、母さんがディサービスに行ってしまうと一人になるとさみしい。ずっと、二人で一緒にやっていきたいと思っています。」そんな言葉が出ます。トメ吉さんの言葉に、礼子さんは「父さんが今まで一生懸命子供を育ててくれたことは本当に感謝している。子供たちも少し勝手気ままに自分たちの生活をしているところもあるから、父さんが怒ってしまうのも、私は理解できます。子供たちと行き来ができなくなるのは、さみしいです。でも、私は父さんと一緒にいたいから我慢します。」と話します。その口調はとても認知症の礼子さんとは思えないのです。礼子さんの認知症は進行していて、幻視があったり、今、話しをしている内容も忘れてしまう、そんな状況でした。けれども、トメ吉さんは、自分たちの生活についてケアマネに相談する時には、礼子さんのディサービスを欠席させ、自分の隣に礼

子さんを座らせ、「これからのことを話すから、一緒にちゃんと聞いていなさい。」と説明します。礼子さんのことをこれまでと変わりなく「母さん、母さん」と声をかけ自分の思いを話している時に、対応している礼子さんの言葉は至極道理が通っているのです。トメ吉さんも、礼子さんが認知症であることは忘れてしまっているかのように、夫婦としてふるまっています。

「母さん、お客さんなのだから、お茶を入れてきなさい。」そんな言葉もかけます。礼子さんは、お茶の入れ方などすっかり忘れていました。けれども、最近は電気ポットに水を入れそのスイッチを押すところまでできるようになっています。その後はお湯を沸かしていることは忘れ、お茶が出されることはありませんが、台所で考えながら動作している礼子さんは、トメ吉さんや娘に頼り切っていた以前の姿とは違います。

今、トメ吉さんのやや頑固な考えが、子供たちとの関係を疎遠にさせていますが、その事が礼子さんに妻としての姿を呼び戻しているようにさえ映ります。勿論、礼子さんの認知症が改善されているわけでもなく、日常生活動作が自立に向かっているというわけでもありません。ただ、トメ吉さんが、礼子さんを「認知症」というフィルターなしに、接しているほんの短い時間、礼子さんはトメ吉さんにとって欠け外のない「妻」の姿になっているのです。

認知症ケアのあれこれが色々なところで説かれます。勿論、ケアのポイントは否定しません。けれども、このご夫婦をみると、「認知症の妻」ではなく、「長く連れ添った妻」という気持ちで接することが、礼子さんに対する尊厳であり、礼子さんの力を最大限に発揮させているように感じます。

そして、同様に、体が思うようにならない父親の譲らない頑固さに、「父さんが、自分の力でやっていける、子供に頼りたくない、と思っているうちは、頑張りがきくのだと思います。父さんからのSOSが出るまでは、好きなようにさせます。」と言って遠くから様子を見ている娘の対応も、トメ吉さんの力を引きだしているのでしょう。

ディスカウントされずに認められること、それがエンパワメントになるのだと感じます。

「きみに読む物語」という映画を観たことがあります。その映画の場面が、礼子さんとトメ吉さんと重なることがあります。

人生は山あり谷あり、それでも、少しずつ前に進んでいっている。愛する人と一緒に・・・

*プライバシー保護の観点から、事例は事実情報を加工しています。